

石狩地区 新規就農者紹介



2024年純農ボーイ グランプリ受賞！

※純農ボーイ…北海道農協青年部協議会主催の若手農業者のコンテスト

【就農までの経緯】

岩本農場を経営している叔父に後継者がいなかったため、農家をやらないかと誘われていました。当初は農家になるつもりはなかったのですが、大学で福祉の勉強をしていた際に農福連携に想い入れがある教授と出会い、農福連携に興味を持ち始めたことで農家になることも考え始めました。

福祉の現場を経験してから就農しようと考え、大学卒業後は千歳市内の精神科でソーシャルワーカーとして2年10か月間勤務した後、に就農しました。

岩本農場（千歳市）

2025年8月取材

河野 慎さん

就農年：2020年4月

経営形態：畑作

作物：小麦、大豆、てん菜、なたね、そば、落花生

【就農して感じたこと】

就農して1、2か月で農家を辞めたいと思いました。祖父と叔父の2人から農作業を指示してもらっていましたが、それぞれ言うことが違っており困惑していました。農業用語や機械整備、作物の栽培方法、農産物の出荷先等、何も分からないまま時間が経過していきました。当時はコロナ禍であったため、外部の人と接することもできず孤立している状態で、休暇も取得できず辛い日々が続きました。

就農2年目にJA青年部に加入し、若い農業者がいることに驚きました。JA青年部に入ったことで、同世代の人たちに悩みを相談できる環境ができ、そこから農業に前向きになりました。

仕事を覚えてくると自分で考えながら農作業ができるようになり、2023年からは農福連携の取組として落花生の栽培を始めました。落花生は手作業が多く農福連携に適していること、北海道での生産者はまだ多くないことから差別化ができると考えたこと、そして、大学時代の居酒屋のアルバイトで茹で落花生の美味しさを知ったことが栽培のきっかけとなりました。また、茹で落花生の販売などで農業の6次産業化にもつながると考えました。



【落花生のほ場】



【収穫を待つ落花生】



【多くの実を付けた落花生】

【落花生栽培について】

2024年から本格的に農福連携に取り組み始め、2025年は落花生の栽培面積を20aに増やす予定でしたが、春先の天候不順で育苗が上手くいかず、作付けは10aとなってしまいました。

落花生の栽培は農業改良普及センターの普及指導員からアドバイスをもらっています。収穫後は、千歳市の道の駅や知り合いの飲食店に卸しています。落花生の栽培をSNSで知り、注文してくれる方もいます。



【なたね収穫後の畑】

【工夫していること】

毎日、作業日記をつけ、翌日の作業計画を立てています。前年と比較し逆算することで効率よく作業ができるようにしています。

農作業については、就農1年目は分からないままにしまうことが多かったのですが、今は分からないことは放置せず、叔父などに聞いてすぐに解決するようにしています。

農福連携について、事前に指導員と打合せをしたり、障がい者に作業体験をしてもらうことで、障がい者が作業をしやすくなるようにしています。

JA青年部に入ったことで、同年代の人と知り合う機会が増えたので、育苗のタイミングや農機具などについての情報交換をするようにしています。

【地域との関わり合い】

千歳市の無形文化財である「泉郷獅子舞」が地域の神社で毎年催されており、毎年参加しています。獅子舞の練習などを通して地域の方々と交流をしています。

地域の行事は普段と雰囲気が違い、楽しめています。

【オフタイムの過ごし方】

就農1年目は前職と違って休みがなく大変でした。その年の冬に、農場の経営者である叔父に直談判し、心身のバランスをとるために日曜を休みにしました。毎週日曜日を休日としていますが、農作業との兼合いで必要に応じて月曜に振り替えたり、農繁期は休めないこともあります。

冬の期間は休みになります。今後は、本州の農福連携や落花生栽培の現場の視察に行き、見聞を広げたいと思っています。

【就農を目指している方へアドバイス】

栽培している作物や経営規模が似たような人とコミュニティを作ることが大事です。その中で情報交換などができれば有益です。

農業には自由度があり、自分で農作業を組み立てていくことなどの楽しさがあります。

自分で野菜を栽培し販売するようになって、お店で販売されている野菜などへの感謝の気持ちが強くなりました。消費者の食べ物を作るという責任感を感じると同時に、大変な農作業も消費者のために頑張れるようになりました。

【純農ボーイについて】

2024年に石狩地区千歳ブロックから選出され、グランプリを受賞しました。オーディションでは、農業や青年部活動に対する思いや農福連携について正しい障がい者福祉を知ってもらいたいという思いをアピールしました。グラ



ンプリ受賞により、他地区でも顔を知ってもらい、新たなコミュニティが生まれたりしています。農福連携の啓発活動にも繋がっていくと思っています。